山とスキー

第二十八號

札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年八月一日發行　　大正十二年七月三十日印刷納本

第二十八號目次

記事

詩　（一）

丸木小屋の作り方　ホーレス・ケバート　松川五郎譯　（五）

丸木小屋設計圖　（五）

シュネーツァイトとゾンマースキーに對する私見　廣田戸七郎　（八）

青山日記　本田治吉　（一七）

彙報抄錄

圖版

北鎭岳より見たる愛別岳　松川五郎　（一三）

旭岳より見たる北鎭岳淩雲岳黑岳　同　上　（一三）

大正十二年八月發行

圓が笑ふ
四角が躍る

黑の悲しみ
赤のよろこび

逝け
一切凡俗塵劫の影

全てを否定し
大地と虛空との限界永劫の一點に立ちて

大我を意識せん哉

（一九二三・七・一〇　い・か生）

1

丸木小屋の作り方

ホーレス・ケパート
松川五郎譯

戸を開けば靜かな山の神秘と相對し、戸を閉しては爐の薪がほそほそと燃え、湯沸(ユワカシ)はたぎり、吾々はそれをかこんで、ゆつくり煙草をくゆらしながら靜かにお話などする氣分は何に例へやうもない。と、ケパート氏は書き出してゐる

本當にさうだ、アルペンの寫眞を見せられ、話をきかされて一番心をひかされるものは、あの粗朴ながつしりしたいかにも住み心地よささうな丸木小屋である。ケパート氏は續けてゐる。テントは、ほんの一時のかくれがで、これに比べれば小屋は一個のホームである。丸太の壁は嵐を恐れず、野獸の侵入にも少しの不安を懷かしめない、内には吾々が靜かなやすみをとる寢臺や、テーブル、腰掛、戸棚食糧を貯へる箱、二三の棚、爐又はストーブと云つた樣なものを備へてあり、水場には臺所道具の一揃が使ひ易い樣に置かれ、燥いた薪が貯へてあつて、いつ行つても小屋は吾々の來るのを待ちうけてゐた樣に見える。

單に小屋と云つてもいろ〳〵あるが、こゝには小屋全体が一部屋になつてゐる最も簡單な丸木小屋の事を述べる事とする。

それには第一圖に示す樣な大さ(一四呎×一六呎)のものについて以下簡單ながら說明してゆく。

今此位の小屋を作るのに要する道具をあげて見ると

斧	二	小型鋸	一	鑿(ノミ)	一
鉈	二	挽割鋸	一	三角鑢	二
横目鋸	一	孔切鋸	一	卷尺	一
				砥石	一
				物差(モノサシ)	一
				ロープ(五十呎)	二

大鎚（ブチ）　一　鑿（キリ）　三　曲尺　一　墨糸　一
鐵製楔　二　螺鑽　二　水準器　一
スコープ　一　ナイフ　一　錘子　一
ツルハシ　一　粗鉋（アラガンナ）　一　鑢（ヤスリ）　一

此等の外にもあるけれどもこれ丈けあれば事は足る。ことにこの表の中には單に家具を作る丈けにしか使はないものもある。

次に用意すべき材料をあげると

一、厚さ約一、二五吋の厚板……床用等
一、厚さ約八分の七吋の板……戸、扉、棚用等
一、金釘（大、中、小）
一、蝶番（チョウツガイ）（大小）……戸、扉、戸棚用
一、鐵板……爐邊用
一、鐵の棒……鐵瓶掛
一、丸太（大小適宜）……小屋の回壁、根太、桁（ケタ）、棰（タルキ）用その他
一、石材……煙突、土臺石用等

等である。これらの中には山で得られるものもあり下からはこばなければならないものもある。

小屋を作るべき場所――排水がよく、しかも近くに水を供給する泉か、きれいな流があり、若し周圍に大きな樹木があつて小屋を日陰にしてしまう樣な場合には切りはらはなければならない。

屋根用の板――屋根は柿板（コケライタ）や屋根用のフエルトなどで葺かれるが、いづれにしても、それを打ちつけるべき板が要るので近頃は、これらのものは用ひずいきなり厚い板で葺くのが普通である。これは外氣にさらされてそり反つたり、ひゞが出來て雨漏を生じ易いが、よくからして用ひれば大した事はない、とにかく板は近くに生えてゐる木から第二圖にしめしてある樣にして都合のいゝ長さに割取られ、直接行桁、棰に打ちつけられるのである。

丸太材――材は何んでもよいが輕くて、仕事がしやすく眞直ぐなものを撰ぶべきで、それには松の類だとか、栗の若木などが使はれる。たゞ一番下の土臺となるべきものは持のよい柏、栗、櫻などがよい。

切り倒す時期は春か夏早くにすれば皮をはがしやすい。切つたものをそのまゝ皮をむかずに長く放棄してをけば腐れを生じ易く虫がつき易い。

四圍の壁となるべき丸太は内側の寸法より三呎位長く切らなければ角々の合せ目で不足を生じて來る。

隅石――若し小屋を建るところが平たい砂地又は砂礫土ならばそのまゝその上に丸太を積んでゆけばよいが、若し普通の土ならば小屋の各隅に隅石（土臺石）を据ねばならない、その土臺石の上に先づ第一の四本の丸太を方形に渡して各隅を正しく直角にし。削つたり、板又は石をはさん

で四本の丸太の表面が同一平面上に在る樣に保たなければならない。これをたしかめるには、一つの隅から他の隅に對角線にそつて長い定矩を渡しそのほゞ中央のところに水準器をあてゝ見るがよい。そして各丸太の中央に於て、丸太が弛んだり、はずんだりしない樣に小さな土臺石を据ゑる。丸太根太の兩端は後に述べる樣にきざまれ、組合せられる。

これがすむと煙突と爐の土臺となるべきところに平らな石を据ゑ、根太がこの石とふれるところでは根太がうまくその石の上にをちつく樣にする。

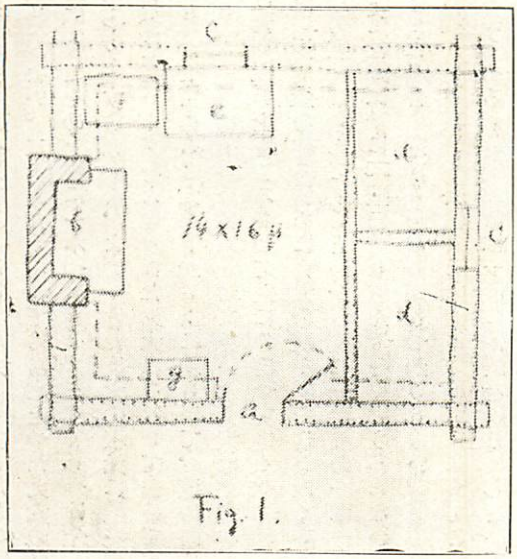
四隅に於ける丸太の組方——これは刻み合すので數種の方法がある、その内最も手早く出來るのは第三圖に示す樣な刻方である。丸太の脊に楔型の刻をつけ腹にはV字型の刻をつけるのである。この仕事はほんの目分量でやるので熟練な職人を要する。もう一ッの方法は第四圖に示す樣なやりかたで、丸太の腹になる方を丸太の半分所迄丸く刻みそれをつみ重ねてゆくのである。これは丸く刻むのが少しむづかしいが割りにピッチリ合つて出來ばえもよい。

第三の方法は丸太の兩端を第五圖の樣に背と腹に於て直徑の四分ノ一づゝ枘(ホゾ)の樣に切り取り交互に組合せそれを一々大釘で打ち附けてゆくのである。丸太があまり長いのを得られぬ場合、或は比較的細い丸太を用ふる場合を可とする。餘り太いのだと非常に大きな釘を用し打つのが大變である。

最後に非常に簡單でことに素人がやるのに便利な方法は丸太を小屋の内部の寸方(ウチノリ)(内法)と同じに切り、それを第六圖の樣に四隅に立てる切り口がL字型をなす樋(トヒ)(建築上で云ふ)にうちつけてゆく方法である、L字型の樋は丈夫な材で可成り厚い板を用ひなければならない、又その長さによつて小屋の壁の高さがきまる事も想像出來る、かくして各々の端を樋に打ちつけて仕舞つたならば、L字型の凹(クボ)みを圖にしめされた樣に適當な丸太を四つに割つたものをはめ込んで釘附けして隅をふさぐと同時に益々强固にするこれは前に述べた組合の方法よりは容易であり、早く出來る。

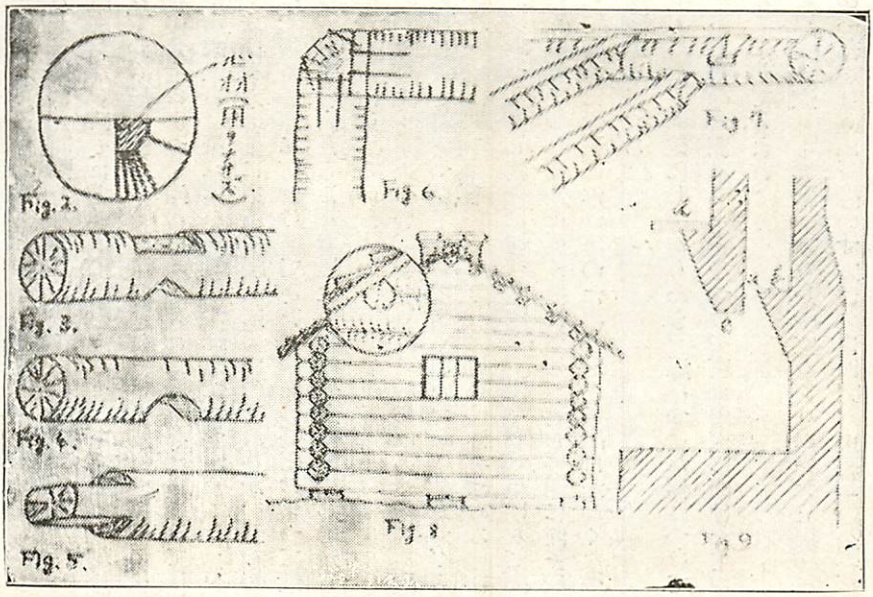
根太と四圍の壁——根太を張るのはしなわない程度の丸太で背をけづつて床と密着する樣にし第七圖にしめす樣にけづり四圍の土臺となるべき丸太にあけてをいた穴にはめこむ、各丸太の間隔は二呎位にする。

さきに述べた壁を築く方法はこの根太が出來てからだんだんにつまれてゆくのであるが、丸太の兩端の太さには必ず太、細があるからいつも細いのと太いのとを交互に積んでゆかねばならない。さうすれば丸太を偶數本積めばいつも平らな面を得ると云ふ譯である。丸太の層が低い時は譯



丸木小屋(平面圖)

a —入口
d —爐
c,c—窓
d,d—寢臺
e —テーブル
f —戸棚
g —流シ
點線ハ棚ノ位置ヲシメスモノトス



なく積めるが高くなると次の樣な方法を用ひて丸太を卷き上げるがよい。二本の丸太をすでに出來上つた丸太の壁によせかけてその上端に一本づゝロープをくゝりつけ今上にあげやうとする丸太を、よせかけた丸太の根元に壁を平行にねかせてロープをよせかけた丸太にそはせて引いて來てそのねかせてある丸太を下から上にからげて、壁の向ふ側から二本一緒に引張ればねかせてをいた丸太は丸太をよせかけた丸太の上をころがつて上にのぼつてゆく。

窓、戸、爐を作る爲めに丸太の壁を鋸で切りぬく時は第八圖の窓を注意して見るとわかる樣に一番上の一本は全部切つて仕舞はずに『型に切り込んでをく、さうしないと出來上つた場合に窓なり戸なりがしつかりしない。

屋根——屋根の傾斜は、その土地の風土によつてことなるものである。乾燥地では一般に傾斜をゆるくしをいてもよいが、濕潤な地方では急傾斜のものが適當してゐる。大概二分の一勾配より緩くはない。なほ雪の澤山降るところではことに急にし　いと、積雪の重量でよけいな歪を受け又緩傾斜だと屋根板の重ね目から雪水がつたつて水漏をやりやすい。

屋根を組むのは檐(ノキ)から始まつていくらか括出(ハネダシ)をつける。行桁と壁との組み方は壁の場合と同樣であるからすこしはみ出る事は無論である。たゞ壁と壁との場合は上下の丸太が密着してゐたが行桁と壁との場合は壁の方は同じ事であるが行桁は或間隔ををいてゐる丈けの違ひである。行桁が出來たならばそれと直角に桷(クルキ)を渡しその上に前述の羽目板を下から順次上方に桁と平行に釘附けして行つて棟には屋根の角度によつて適當にエグられた丸太をうちつけて屋根は出來上る。第八圖を見ると大抵想像がつく。

床は根太の上に床板を張ればよいのであるが、最初の年は、極く簡單に釘附けしてをいて季節の變化によつて翌年根太が落着いたところで根太の弛みや高低を直してからしつかり釘附けするのがよい。

戸及び窓——入口の戸を切りぬく時にはあらかじめ縱の兩側に板を打ちつけてをいて切りぬいた時に丸太がぐらつかない樣にする。そして戸の巾は周圍に枠をはめる丈け余分を取つて少し廣めに切つて置く。扉を取りつけるには丈夫な蝶番を用ひ內側に開く樣にする、若し外側に開く樣にしてをいたならば雪が降つた場合などに出口がなくなつて仕舞ふ事になる。

窓も戸口と同樣にして切りぬき、扉をつけた樣につけてもよいし枠の內側にシキイをつけて唐紙の樣に開けたてをする樣にしてもよい。

煙突と爐——爐はやはり戸や窓を切りぬいたと同樣に壁の一部を切りぬき爐の寸方は、巾四呎、奥行一、八呎、高

さ三呎位が普通であつて、爐の巾は普通少し狹い位の方がよく部屋があたゝまる。爐の正面の壁が眞直ぐ煙道にぬけあがつてゐると、空氣の重い時、風の強く吹き下す樣な時に煙の逆流に對する丈けの吸ひ込みが得られず部屋中がけむる樣な事になる、だから第九圖に示す樣に正面の壁は上の方を前方にかたむけ、煙突につゞく口を狹めてをくと非常に吸ひ込みの具合がよい、圖に就いて說明すると(c)の面と(b)の面との差が約五吋、(a)の前後の開が約三吋又は四吋位にしてをくと楔形をした(b)が風の逆流をふせぐ。(c)の部分は鐵板をあゝ石を保護するのが普通である。煙突は石を積みその間を粘土やセメントで接合して、その高さは棟を越える程度で適當にやればよい。

寢床は第一圖に見る樣に爐と反對の側に作られるのが普通で、大きさは小屋を使ふ人數によつて種々ことなるのは無論で床から一呎半位高く、やはり丸太を用ひて、棧敷の樣に作る。

そして寢床に接した壁には高窓をつけて朝日を入れる事が出來る樣にして置くと氣持がよい。(第一圖參照)

これで大体小屋そのものゝ事を述べた譯で、あとはテーブル、椅子、臺所用、洗面用の流し、その他炊事用の器具などを備へたならば完全な山小屋となる。これ等の道具も一々町からかつぎ上げないで、山で作る方法が書いてあるけれども余り煩雜になるからこゝには略す事とする。

"Camping and Wood craft" による。

出版界

山岳 第十六年第三號

しばらく出なかつた『山岳』が漸く出た。奥上紙と題し同方面の記事を輯めたものでなかなか苦心の跡が見える。

登高行 慶應体育會山岳部年報第四年

此も昨年は出なかつた樣だが今年は二年分をまとめて甚だ内容の充實した立派なものになつた。『山岳』が時流に超然として雪なき山を取扱つてゐるに反し此はまた雪の登山に就て權威ある記事と印畫を滿載してゐる。スキー家、山岳家の必讀すべきものである。

山行 槇有恒氏著、改造社出版

著者の好みであろふ清雅な裝釘を以て出された。アルプス行と立山行とクレッテライの記事が重なものである。人も文も今更云々するまでもない。

北海道鐵道旅行案内 北海道山岳會發行

各方面にわたつて詳細に記されてある。一般觀察旅行者の間に最大の便宜を與ふるものである。

Schneezeit と Sommer-Ski

に對する私見

廣田戸七郎

緒言

近來スキー登山が冬から春の季節にかけて行はれる樣になつたことは否むことの出來ない事實である。冬スキーの傳來と同時に夏スキーの移入さるべきことは當然の事であつたが、一〇年前には、未だそれ丈けの餘裕が日本にはなかつたのだ。否夏スキーは我國の登山界に因緣が薄かつたのであらう。

私は興味の多い春の季節と所謂夏スキーについて考へをまとめて見た。專ら我が國に於ける春の登山と夏スキーのことを主材として稿をつづり合せて見た。私は病みつききつたスキーランナアではあるが、ベルグシュタイゲルではない。否ベルグシュタイゲルと稱するには、余りに經驗がなさ過ぎるのである。或は當らぬ所があるかも知れない。大方の是正を俟つ次第である。

雪期（シュネーツァイト）に於ける二期

私は我が國の雪期を分つて、次の二期とした。

此處に使用する雪期とは、スキーを穿いて完全に麓から山頂に行を續け得る間の時期を意味するものである。

即ち季節で云へば一二月初めから五月初旬頃に到る間を包括して稱するものである。

大体に於て私はこの雪期を降雪量、氣溫、雪溫、雪質等の一般氣象狀態と、登山者が山から享ける觀照の程度氣分と云つた樣なものを綜合して二期即冬期春期とした。

冬期　冬期は十一月末より三月初旬までを包括して云ふのであつて、良質の積雪を有し、且降雪量も多く、氣溫、雪溫等も低く、殊に北海道では、氣溫は氷點

下平均七乃至九度位である。そして吹けば飛散する樣な、全く乾燥しきつた硼砂の樣な粉雪の降り積る時期で、從つて天候の變動も多く猛烈な吹雪に何回となく見舞はれる、登山者にとつて、思ひ出の多い、いろ〳〵な活教訓を與へる季節である。

春期　前者の凄味のあるのに比して、割合にノンビリした登山氣分を與へて呉れる、三月中旬より五月初旬に到る時期、之を私は春期と名づける。

冬期（ヴインテルツアイト）の影響を受けて、積雪景は雪期中で一番多い位であるが、次第に降雪量は減じ、軟味のあつた硼砂の樣な粉雪が日一日とカン〳〵照りつくる日輪の熱に犯されて、融け行くなやみを有する凋落の時期とも云ひ得やう。さあれ朝夕の寒冷にクラストを孕み、朝燒夕燒けに銀海の波をただよわせ云ひ知れぬ環境の内に、スキーランナアを誘ひ行く所謂ザラメツアイトには棄つることの出來ぬものがある。靜かに膚を吹き行く涼風は、本當に平和な春の氣分の漲りである。

夏スキーを穿いての登山

私はこれから、春のザラメ期に於ける登山、特に夏スキーを使用しての登山のことを述べて見る。

兎に角登山そのものに對する目的とか趣味てふものは、要するに凡べての異つた環境の中に入つて、自然の風景を觀照し、享樂するにあると云ふことは、何人も否むことは出來ぬところである。而して、特に春の登山に於てこの意味の深いものを見出すことが出來る。

スキーが我が國に傳つてから、スキーを穿いての登山と云ふものが行はれる樣になつたのが、僅々一〇年前のことで、春先即ちザラメ期に夏スキーを穿いて登山するてふ事は、本當に文字通り最近のことで、記錄も亦數ふる程しかないのである。

凋落の運命にあるアルパインスキー

日本人の体格に相應した一九五糎の樺材に、重いリリエンフエルデルビンデングのついたスキーを穿いて、二〇〇糎に余る單杖を携へて、レルヒ直傳の墺國式登山術に則り所謂スキー登山は一〇年以前の我が國のは、登山界に一新機軸を開いたものであつた。この意味に於て、軍人レルヒ氏は、我が國スキー登山界の革命兒と云ひ得やう。

スキーで山へ行かうとする人、特に春の山に行かうとする人がだん〳〵殖えつゝある現在の我國の趨勢には、もう何と云ふても、あんな重い舊式なスキーは當を得たものではあるまい。現在墺國式スキー登山術そのものには未だ可成り探るに足るべき點はあるが、所謂アルパインスキーなるものにはとんと探り榮がない。速かに葬り去らるべき運命をもつ悲しい、哀れむべきものである。

數年前否現在でも時々耳にすることであるが、諾威式スキーは山登りには不適で、畑用のものであらねばならぬと云ふ。こんなことは實際今日登山に諾威式スキーを使用して、不都合のない確信を握つて居る者には、むしろ異樣に感ぜらるるのである。

春の硬雪時に、何を苦しんで一九五糎もある、重いリリエンフエルデルビンデングのついたスキーを穿いて春光の熱を身に受けて、餘計な徒勞に苦しみつゝ、はかどる筈の行程も冬期と大差ない樣な能率の上らぬ登山を行ふものか少からず疑問とせらるゝ點が多い。

近頃は、單杖も影をひそめて、兩杖が之に代つて使用されて全く單杖なぞ顧られて居らぬが、然し三〇度以上の傾斜の斜登行とか、下降には矢張り助けとなるらぬことはない。然し之も實際では兩杖を一緒にして十分單杖の用に供することが出來るのである。

こんなことは今更特に云ふ程の問題ではないが、兩杖の流行と共に、單杖の根本精神が忘却されることを氣づかふから一言したわけである。

所謂夏スキー

歐洲アルプス邊では、春から夏にかけて、この所謂夏スキーを使用しての登山が非常に盛んの由で、可成りその研究も進んで居る樣である。

時勢遲れのスキー術に甘んじて居る我が國のスキー術の大家は、傳統から未だ目醒めず、夏スキーのことなぞ全く顧みて居らぬてふことは、誠に情ない次第である。

春先の山登りには、スキーの埋る憂も少ければ、從つてラッセルの必要もなく、靴と締具の間に雪の入ることもないから諾威式締具は慥かにリリエンフエルデルの夫れに優ることを知るのである。

吾等は同じ一九〇糎のスキーにリリエンフエルデルビンドウングをつけた時と、ウイットフエルドビンドウングをつけた時とに大きな輕重の差を見る如く、同じウイットフエルドビンドウングを附するに當り、その材の長短の差により、少からぬ輕重の差を知るのである。更に春はスキーの埋沒てふことは零と見てよいから、可及的輕く、破損の程度の少い、歩行の能率をあぐるに足る、操縱の自由な、携帶に便利なものが有利であることをも知る。又享樂中心の登山として、第一條件たるべき滑降に對する興味と云ふことも考へねばならぬことである。享樂といふ事の特に著しい春スキー登山に於て、最も有効に、最小の努力で最大の享樂を得る爲に如何なるスキーが良いか。如何なるスキーを撰ぶべきか、以上のことを綜合的に考へて、春夏のスキー登山に於ける夏スキーと云ふものが生れて來たのである。

夏スキーの長さ

前述せる如くザラメ期は、スキーの埋る變なく、ぐんぐん行程の進行する時であるから、滑降の興味の度の減ぜぬ程度で、可及的輕く、短い、形の小さいものが良い。

別段目で見、心持で感ずる四圍の風光に對する觀照の氣分てふものは、スキーの大小、長短によつて變る筈がない又スキーの長さを極端に短くする樣なことをせねば、滑降に對する愉快、樂しみと云ふものも甚だしく減ぜらるゝことはない。

夏スキーの長さと云ふものも、その人々の身長の長短によつて、規定さるべきものとは思ふが、私の經驗よりすれば、先ず日本の普通のスキーランナアなら一三六糎位のものが適當と思ふ。私は一六〇糎の日本人の穿く夏スキーの長さを一三八糎として考へて、次の樣な標準を作つて見た

身長	適當な夏スキーの長さ
一五一糎	一二七糎
一六〇糎	一三八糎
一六三同	一四一同
一六六同	一四四同
一六九同	一四七同
一七二同	一五〇同
一八一同	一五七同

これは全く私の經驗に則つたもので、大体に於て、その人の有する身長より約三〇糎短いものを使用するのが宜しいと云ふ結果を得た。そして先ず〳〵日本のスキーランナアでは一五一糎を超えた夏スキーは全く意味をなさぬと云ふことを知つた。

スキーの巾及び厚さ

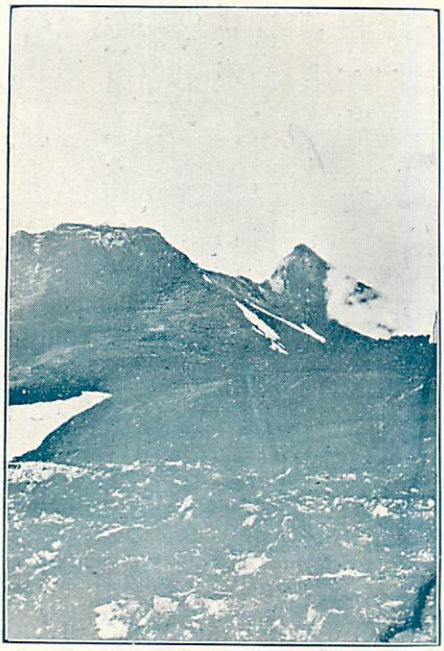
巾は形が小さいなりに相當狹く作られねばならぬ。まづ普通冬期使用して居る一九三糎のものの有する巾より一乃至二糎位狹いものが結構である。長さは短くなつても堅硬なものを必要とする以上、餘り狹いペナ〳〵したものや、薄いものでは、折角の夏スキー使用の効果が零となつてしまう。

厚さは一、八糎位なければ、減り易くて使用に堪えぬ。雪質が荒いのであるから、冬期使用のものに比して厚さは減じても比較的には厚く作らねばならぬ。

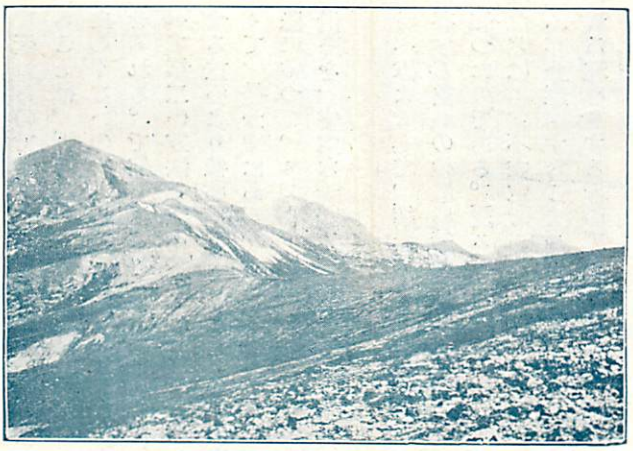
スキーの締具及締具を附着すべき位置

締具は文句なしにウィットフェルドのものでなければいけない。ベ●ベ●ビンドウングは簡單な點に於て良いが、革紐丈のものより金屬類が多い丈に重くなる傾がある。エレフゼンのない長紐のビンドウングも良しいと思ふ。兎に角金屬類の少い故障の割合に起らぬものでなければならぬ。

締具の附着位置　私は最初この問題について、二つの考へ方をした。



北鎭岳より見たる愛別岳　　松川五郎



旭岳より見たる北鎭岳(左)凌雲岳(中)黑岳(右)松川五郎

一つは、一三八糎の夏スキーを使用するとして、それのもつ重心部よりも前方に締具を附する方法である。

これは登る時には、ドン〳〵スキーを運ぶことが出來て普通歩と全く同じ程度の調子で登れるのである。然し締具がスキーの重心より前部にあることは、下降に當つて、その滑降度を鈍らす點に於て、良しくないのである。特に短いスキーではこのことが痛感せられる。で然らばこれと全く反對にしたならどうかと考へて第二の方法を試みたのである。即ち締具をスキーの有する重心より後部に置くことこの方は登高には、先端が長くて、僅かではあるがエネルギーの損失を招く、そして滑降に當つて、スピードは出るが、猛烈不安定で、滿足な直滑降を、安定な姿勢で續けることは出來ぬ。

一長一短を有する前二者の考へ方よりして、結居矢張り中庸を得たる方法即スキーの存する重心の位置に締具を取り附くることが宜しいことを知つたのである。夏スキーは兎に角短いのであるから滑降などは相當不安定であるが、冬出來ぬ樣なスウィングを思ふ存分應用することが出來る點に於て冬のスキーと大いに異る趣を有するものである。

スキー材

夏スキーとしての材は、頑丈な、硬質の、餘り彈力に富まぬ、然し脆いものでなく、滑度の大なるものでなければならぬ。板目でも柾目でも大差はない樣に思はるゝが、矢張り何れかと云へば、板目の方が丈夫な點に於て宜しい。

雪質の關係上隨分角が欠け易いから、硬質の材がよろしい。然し餘り硬質過ぎて。滑度が減じたり、全く彈力がなくなつたりしては、スキーとしての第一條件を失ふことになるから、さうした弊に陷らぬものを撰ぶ必要がある。

又材の後部が容易に反り返るものであるから、可及的、ハメ木を使つてスキーを取扱ふ樣にせねばならぬ。私は是等の欠點を補ふものとして、イタヤ、クルミを推稱する。トネリコは畑スキーとしては、良材に相違ないが、夏スキー材として使用するには、不向と思ふ。

スキーの重さ

夏スキーの特徴とするところは、携帶に便なること、即一寸小脇にかゝえることか、ルックザックの脊に結びつけることの出來る程度のものたることが必要である。まづ大体一瓩前後のものが適當であらう。

ごんな時穿くスキーでも底に溝を一本乃至二本堀ることを忘れてはならぬ。

稿を結ぶにあたつて

スキーが小形の故に、滑降に對する十分の享樂は冬程望めぬが、然しスキーとしての夏スキーにも捨て難いものがある。何もかも打ち込んだ者にとつて、滑降の多少なぞは、

大して苦にもならぬ。ヴインテルツアイト丈のスキーに甘い汁を吸ふて、ザラメツアイトの本當の雰圍氣に接することの出來ぬ、否經驗のないスキーランナアは、限りなく贅澤な連中か、同情に値する連中かに相違ない。

春から夏にかけてザラメに變り行く雪が、人里離れた山奥に積り乍ら、溪川と默然と語り合ふこころにも、少からぬ言味があるに相違ない。徒らに穢い草鞋に踏みつけらるゝ爲に殘つて居るものでもあるまい。

ザラメツアイトの研究と共に生れ來るに相違ないものは夏スキーである。

仲び行く日脚に追はれつ、次第に消え行く物凄い吹雪の足元から、湧き來る陽炎の群の押し寄せる時期、そこには樂しい、愉快な、暖味に滿ちた興趣の深い春のパラダイスが展開されて居る。

地上に赤土をみつめても、一三八糎の夏スキーを穿いて少しもラツセルの心配なく、ざん〳〵歩いて、勝手な所で心ゆく許り、ドレースブルングや、スラロームのかけるザラメシーズンは、文字通りの享樂を與へてくれる。分けて北海道の山陵に漲る春の樂園は、小さきスキーランナアの慾求を限りなく滿たしてくれるものであらう。

（一九二三、六、一七脱稿）

アルピニズムス

現今に於てはアルピニズムスは吾等の最も完全な共有財産となつてゐる。そして更にまたそれは現在の吾等の文化的な生活には缺くことを得ないひとつの要素となつてゐるのである。吾等は何んでも自由に、きまゝにたゞその山々の引き寄せる强き誘引のまゝに、この文明の煩瑣な足枷を脱して、暗緑の高き樅（クツヤ）の森を過ぎて、花咲く牧場の草地に或ひは雪の燃えさかる氷河を越えて、フィルンの輝かしい Höhenlicht のうちに、また更に雲霧の搖曳する自由な、高き氷と岩のみの境地にさまよひゆくことが出來るのである

C. Hügler.

(Ski. Jahrbuch XII 1917)

青山日記

本田治吉

『先生、遂に又此の山の中に逃げ込みました。暫時でもいゝ彼の馬糞の都から逃れたい、世のわづらわしさから少しでも良い逃れたい。そしてあたゝかい自然の懷に抱れて見たい。斯ふした氣持で札幌から脫け出て來ました。やつぱり私は山の誘惑には勝てなかつたのです。行手には、如何にも喜んで迎ゐて呉れるかの樣に春の山が白く光つて居ます。斯ふした世を離れた氣持は、こても浮世の人やスケート場で滿足して居る樣な人には味ふ事が出來ぬものでありませうか怠け者こ罵る者は罵れ、狂氣と云ふ者は云へ、そうした者は決して自分等の樣な氣持を知らぬ者である。それ等シヤボテン共の味ひ得ぬ氣持を味ふ丈けでも嬉しい。斯ふした清い自然の中に飛び込んだ事を思ふ丈けでも心がおごる。浮世を逃れたこ云ふ丈けでも優越を覺ゆるのだ。こんな氣持でこゝへやつて參りました。本當に彼の美しい夢、彼の美しい詩、美しい自然を享樂するのは青年の中ですね。明日から又コツ〳〵こ山登りを初めます。——青山温泉の第一日の夜に札幌に居らるゝ先生にあげた手紙である。

一、二月の冬の山も面白いだらうけれど、春の山も亦棄てがたいだらう。春の山を思ふ存分味つて見たい。斯ふした氣持から春の合宿を思ひ立つたのである。

一、二月頃の冬の山を男性に例へるならば、三月から四月にかけての春の山は女性に例へたい。冬の山を荒神と云ふならば春の山は女神と稱へたい。

白皚々こしてこの頂からは雪煙を立て、寒風と戰つて聳え立つ冬の山に面接する時は、我々の心は一種の緊張を覺え之に對する征服心を感ずるのである。之に反して彼のとげ〳〵しさを失ひ、如何にも丸味を帶びた春の山を見る時

我々の心は和い。けれども眞面目なそして引しまつた親しみを感ずるのである。

同じ山でも冬と春とはそれ程異つた感じを與へるのである今度の合宿は初歩の人はなく、ジャムプをやる連中と登山をやる連中とで共に全日數一週間の豫定であつた。自分はジャムプの方の事はその方の人にお願して主に山の紀行をその時の日記から抜き書して見たいと思ふ。勿論之のスキー登山は何れの山も一日の行程で大したアルバイトも出來なかつた。そして山とても一〇〇〇、米内外のものばかりであつたから、本當のスキー登山の方から見たり、本當の山岳家の方から云つたらこれは所謂ネーベン的のものにしか數へられぬかも知れない。

二十一日――チセヌブリ――連中は何れも、所謂板さんに云はせれば、ヘチマノオバケに屬する部類のものである。娑婆の所謂シャボテンよりは遙に超越した部類に屬するもの達ばかりである。

谷の底見た樣な所に家があるから、窓から見てもお天氣は良くわからぬ（何しろ冬の大吹雪の時でもこの谷底に入れば、靜穩無事なんだから）けれども青い空には雲一つ見えぬ。涯の上の雪は朝の太陽に反射してキラ〳〵と輝てゐる。早速仕度に掛かる。

昨日の足ならしの爲めに練習場の上の△八三九、三に登つた時は、雪庇が硬くして頂に近い所等は、立木の上を選んではヂッグサッグを切つたり、遂にはスキーを脱いだりせねばならない場合があつた。そして下りはあまりにスピードが出てステムミングが思ふ樣にならなかつた事もあつたので今日は少しその事も考へてあまりワックスは塗らぬ事にした。

まだ冬の頃の合宿の氣分があつた爲めと、日が永いのにあまり注意しなかつた爲めに、裏の丘に上つた時は可なり太陽は上つて居た。目ざすチセヌブリは圓くふくれて太陽の直射に光つて居る。今迄一度として晴れた事のないこまで云はれたニセコアンまでが、左側に白く突立つて誘惑する樣に見える。先づO君の先頭で遙に見ゆる馬場温泉の煙を目あてに、小泉農場の右を通り埼玉農場を左に見て熊本團体に出る。それから一つ谷川を越して一直線に馬場に向つた。冬と異つて先頭の人がラッセルで苦む事もなく、僅かにスプールを止める位のもので冬のアルバイトから見れば非常に樂で、その能率も優に倍以上はあるのであるが、朝方にチラと降つた雪が着いて氣持の悪い事おびたゞしいワックスを塗つても少しも効果がない。此の雪ではワックスも仕方がなかつたのである。初めからワックスを塗つた人までが不平を云ふ位であつた。熊本團体の附近から遂々スキーを脱で歩き出す人が多くなつた。默つてつまらなそ

うに歩く連中の顔が今思ひ出しても吹出したくなる。『あ！つまんない、こんつらムクレタ話が何處にあつて！』

『あ！阿呆らし！』

馬場に着いた時一齊に放たれた言葉がこれだ—今迄こらへにこらへて居た鬱憤が一度に破裂した樣に——

今迄雪に埋れて居た杣人が蘇つた樣に森の中に入つて薪を割る音が森の中の靜かな空氣を傳つて聞えて來る。地殼の中からモク〳〵と硫黄息い湯氣が靜に立上つて居る。

此處でソックスも塗り直して登り初める。此の頂から急に氣温が少し降つて雪質も可なり良くなり前程は雪が付かなくなつた。九〇〇の高さの平地で中食をとる。此處まで來ればもう後二百米ミ少しである。圓いドームが目の上に立つて居る。これから自分が先頭をして初め左の裾から右に折れてヂッグザッグを切つて登り初める。一〇〇〇米から上になると白樺も小さくなりそれに冬の頃の樹氷の跡をかすかに止めて居る。雪面もかたくなり所々氷の樣に光つて居る所もあつた。頂上へ着いた時は、途中でスキーを脱だ爲めに時間をとつたけれど十一時半であつた。出發してから丁度三時間半で着いて居る。馬場であんなに不平を云つた連中が、彼んな『阿呆らし！』なんぞ一言も出さぬ。只口から出るのは『良いな！』これ丈けであつた。一寸空が雲つた爲めに遠くまでは見通しがきかなかつたけれど、四圍の連山が手に取る樣に見える。最ふ歸るなんぞてんで頭にない程皆は山頂の眺に引つけられて居た。

此處から右に降りて『名無』を通り△八三九、三に出て歸るかと云ふ說も出たが、これは明後日の行程と重複するので今日はおとなしく元の道を歸る事にして降り初めた。又O君の先頭で各自好きな樣にボーゲンをかき、途中からはスラロームで九〇〇まで降りそれから一氣で馬場まで辷つたのである。餘り早く歸つてもミ思つて馬場で思ふ存分享樂して三時頃歸る。丁度ジャムブの連中も歸つて橋の上で日向ぼつこをして居る所であつた。そろ〳〵顔が、ピリ〳〵痛み出して來た『朝出る時と歸る時ミまるで人が異ふ』とまで云われる程顔が眞黑になる。

二十二日——ニセコアンヌプリ——昨日の天氣と反對に今日は何となく押し付ける樣な、どんよりとした、そしてむす樣な天氣である。目的のニセコアンヌプリも例によつて雲に包れて樹林帶の終るあたりから上が見えない。後に晴れるらしい豫想が付いて居たので、今日こそは第一頂（△一三〇八、五）まで行つて來ようミ出掛ける。昨日の日中にミけたザラが夜の寒氣に凍つて漸くスプールが付く位に硬い。スル〳〵ミ辷つて行く。お天氣のためか知らぬが、まだ取付の高臺につかぬ中に最早汗が流れ出して來た。汗

止めのために皆鉢捲をして上着を脱で登り初める。高臺の上の廣地をしばらくは斜右に進み、漸く樹林の密な部分から斜左にもつて、それから第二頂から南に走る尾根を白樺の林を縫つて登つて行く。我々のスキーが雪面を辷る音が響くかくて可なり遠くの木の根にかくれて居た兎まで飛び出して逃げて行く。樹林帶を拔ける所で中食するために休む。例によつて携帶の半分を殘してたく。これから上は雲につゝまれて居るのでしばらく休んで晴れるのを待つ中に漸く薄くなり、行先がわかる樣になつて來たので又登り初めた。丁度一〇〇〇近くに來た頃から急に太陽が照り出して、雲を通して我々の脊後から照りつける。丁度蒸風呂に入つた樣に暑く汗は流れ、それに雪面からの反射で顏がヒリ〳〵痛む。其のためにエッヂが立たぬ程でなく、少し雪がスキーに着いたけれども、樂にヂッグザッグを切つて登れた。第二頂に着いた時初めて雲がはれ四圍の鮮かに突立つて居た。第二頂から第一頂に續く尾根の右側を通つて第一頂に至る。最早三角點は破壞してしまつて居た。何處の山へ登つた時でも三角點がこわれてなくなつて居る時程失望を感ずる事はない。吾々としては今度が第一頂を究めた第三度目の樣に記憶するのに。第二回目の時（冬の合宿の時）は雪を堀つて漸く三角點の片割れを見出して持つて歸つた樣だつた。振り返つて第二頂を見れば、千切れて飛ぶ雪が通る度に物凄い影を投げ付けて行く。そして頂が雲の間から現れる時、その姿を見つめてるこ、この山の荒神の精が現れた樣な氣持を起させられるのである。北方はるか下には日本海の荒波が積丹の半島を洗つて居る。今日から加る人々を迎える都合もあつたので、又元の道を降り初める先づN州が先頭を切つてボーゲンを書き初めた。思ふ樣にボーゲンも書けたけれど、雪質が水分を含み少しもスピードが出ない。何時もならばまだ氣を付けてボーゲンを書かねばならぬ樣なスローブでも直滑降で飛ばせて尙飽き足らぬ樣な氣がする位であつた。初めに休んだ、これから樹林帶に入る所で、スキーを脱で乾かしワックスを塗る。顏は雪と太陽のために眞黑に岐けピリ〳〵と痛む。雪の中に顏を突込んで一時的に苦痛を忘れる。何奴も笑へば只齒が笑ふ位のものである。最ふボロ〳〵皮がむけ初めた奴も居るその汚い事見られたものでない。こゝからは愈々下まで一氣に降りるのである。愈々降りんとスキーを着こうとした時、遙か下の方で『オーイ』と呼ぶ聲がする。『おや？』と思つて耳をすませば又一つ『オーイ』と聞えて來る。此方からも『オーイ』と返事したけれど最早それつきり聲も聞えて來ない。勿論それらしい人影一つ見えぬ。きつとおれ達を呼んだんではない』と思つて降り初めた。ほつと一息ついて今降りて來た方を見返れば、折から斜陽に照らされて自分

等のスプールがくつきりと見える。ふと氣が付けば、今我々の休んで來た所を黑い物が登つて行く。良く見れば、それは人間である。而も一人、二人……後から〳〵と姿を現し五六人の人間が進んで行く。今度は此方から『オーイ』と聲を掛けたが返事がない。何時まで立つて居ても仕方ないので歸つて來た。それは今日加はる可き連中なのであつた今朝狩太に降りて、ニセコをやつた事が後で判つたのである。結極一杯食はされた理である。

二十三日――又山の人間が增した。ヘチマノオバケが增へた。そして浮世のシャボテン等が淋しくなつた理である愈々今日からが本物である。行程は靑山溫泉から△八三九、三に登り、其處から新山精練場跡を通つて岩雄登の西一〇八二を貫き、チセヌプリに至り、其處から西の△一〇七六にまで行き、其處から引返して馬場溫泉に降りて歸る豫定である。此の頃の天氣は丁度ペリオデツシュに一日おきに天氣が繰返して居る。此の日も朝から快晴で、難は只空風が强かつた事である。

春の雪の欠點として、やはり朝の間は雪質硬く、少し溫くなると解け出して雪がスキーに附く樣になる。△八三九、三の中腹頃に着き出し、二十日にこゝを通る時立木の上を選んではヂツグザツグを切つた事が何だか不思議の樣な氣がする。それに昨夜一寸降つた雪が水氣をふくみ、上るスロープは皆附着して、北側の降るスロープは皆硬くて辷るによかつた。△八三九、三の頂から右に折れて新山まで一氣に辷り、其處から（參謀本部地圖五万分一の岩内）の付いて居る所を通つて一〇八二、ミイワオヌプリとの間に出る。そして此處から一〇八二の東側の急斜面をヂツグザツクを切つて登る。今度の登山中此處が一番苦しい所であつた。氷の樣に凍つた雪の上にチラと降つた雪が積つて居て少し足の力の置所が變だとすぐザーと辷り落ちる。一人が一度辷ると最ふ後の人は二度と同じ所を通れぬ。中腹までは漸くうのまゝで行けたけれども、道には危險の爲め大部分はスキーを脫いで登り初めた。踵で雪面を破つて足場を作り乍ら、僅か一〇〇米位の所を一時間近くもかゝつて漸く上に達した樣な理である。あまり癪にさわつたので第二馬鹿山と命名する事にした。それはM君達が今の馬鹿山（スキー名）に行つた時であつた。やはり一寸急な斜面を登る時、皆で辷つて困つた事があつた、そして『何だ馬鹿だなあ！この山は！』と不平を云つた。それが遂に今の馬鹿山の名を得たとか（それは手稻山の奧の烏帽子岳だと思ふ）どうもこの山も第二馬鹿の價値は充分にある樣に思はれるこの一〇八二の裏側で風を避け乍ら、元山鑛山を見下ろして中食をとる。此處からチセヌプリの界の八二八までボーゲンを氣持良く書いて降り、そして又チセの東側を氣を付

けて登る。頂上に達した時は正に十二時半であつた。空風こそ強かつたけれど、空は澄み渡り、北には日本海が荒れ狂ひ南方昆布岳の高く聳ゆる彼方に、噴火灣を隔て駒ヶ岳がかすかに見え、東には明日登る可き目國内岳、岩内岳がそゝり立つて居る。西には羊蹄山、ニセコアンヌプリがはつきりと、遠くムイネシリ、余市、さては夕張岳までが白く光つて居る。最ふ斯ふなつては、皆の口から出るものは只『良いな！』これ丈けである。それ程皆は自然の美しさに參つてしまつて居たのである。此のチセの頂上で寫眞をとつて、G、O君の先頭でチセの西側の急斜面を降りる。こゝは先つきの名無一〇八二、の西斜面とは異つて、雪面は硬く、ハイマツのタコが多く出來て辷りにくい事夥しい若し誰かゞ名無一〇七六、か或はその下に居たなら、まるで黒い人間が、チセの上からころがり落ちて、そして下に來て雪の中に頭を突込んで倒れたのを多く見た事であらう下の平な所で日向ぼつこをし乍ら第二回の中食をとる。もうさつき、ころげ落ちた事はちつとも知らん樣な顔をして握り飯にかぢり付いて居る。まだ時間は早い。小一時間ばかりこゝで駄辯つて、愈々最後の名無一〇七六、に向ふ。取付の高臺は丁度直滑降に持つて來いの處女スロープである。これにむごたらしくヂツグザツグを切るのはあまりに殘念である。先頭（誰だつたかよく知らなかつたけれど）にもこれと同じ考があつたかして、自分の望む樣に端の方から登つて行つた。やつぱり歸りにぶつ飛ばすつもりらしい。それから約三十分位にして一〇七六、に着く。ふと氣が付けばMの姿が見えぬ。さあ！と思つて下の方を見たけれど更に其の姿が見えぬ。しばらくして漸く左の山の影から出て來た。何して居たんだらう！と不審の雲がさつとかゝつたけれど、安堵した爲めか、すぐ消え失せてしまつた。F君が明日登るべき彼の目國内岳と岩内岳をカメラに入れて居る間に。明日の行程や、降りて岩内町までの行路を見定めて、撮影の終るのを待つて降り初める。彼の處女スロープの上まで一氣に。皆一齊にそのスロープを降る爲めに此處に止つて待つ事にした。その時ふと自分の胸に先のMの事が思はれた！若しや！と思つて山の影に行つて見ればMが皆をやり過した原因も明になつた理である。やがて皆がそろつたので一二三と我先に一番鎗と云つた風な氣持で辷り出す。連中の言葉を借りれば『ディヤー!!』と辷り降りたのである。そして下では『ギユー!!』と見事クリスチヤニア、テレマーク。そしてほつとして今自分の付けて來たスプールをふり返つて眺めるのであつた。その面には云ひ知れぬ滿足と喜びとがあふれて居る。誰しもスキーをやる人は味ふ事である。美しい處女スロープをヒヤ〳〵と雪

yellow-something

煙を立てゝ降りて氣持良く止つた時、そして自分の今降りたスプールを振り返へる時程嬉しい事はない。遂に一本きりで歸る事が惜しさにもう一度と云ふ事となり、又登り初める。そしてその處女スロープに二十四本のスプールが着いた理である。何時まで居ても切りがない『眞のスキーロイフエルは、享樂するばかりが能でない』と敗けおしみを云つて馬場に向つて降りた。青山温泉に着いたのは丁度四時半頃であつた。最ふ皆の顔は燒けに燒けて眞黑である。最ふ痛みはしない。ボロ〳〵皮がむける人もある。水ぶくれになる人もある。そして遂々熱を持ち出す人もあると云ふ騒ぎである。

愈々青山温泉にねむる最後の日になつた。明日は愈々出發である。そして今日眺めて來た目國内をやつゝけて歸るのである。愈々最後の日が來た！皆元氣に充ちて出發の用意にとりかゝる。

『ぢや元氣で行つて來いよ！』

『あ！有難ふ！行つて來るよ』

こんな言葉がジャムプの連中との間に取交される。

幸か不幸か昨夜から急に熱におかされて此の行に加はれず床の中に皮肉な言葉を耳にする一人の人間が居た。昨日まで元氣に、而も今日の行を夢見ながら希望に燃えて居たものを！今日は彼等と反對に南に、汽車を待つ可くこゝを去らねばならぬ身であつた。何たる不幸なる者ぞ！

やがて山の人は一人の不幸な男を殘して、向ひの涯に姿をかくしてしまつた。

それからしばらくして、その不幸な男は、一人の友達に連れられて、宿の人達や、ジャムプの人達に送られて、後を殘念そうに振り返り〳〵裏の涯を登つて行つた。

× × ×

それから四五日後の事である。ジャムプの連中も歸つた山の連中も歸つた。そして皆が一緒に町を歩いた時であつた。

『まあ！黑いね！』

『ほんとに黑いね。どうしたんでせう？』

と町のシャボテン共が囁やくのを盛に聞かされた。

最ふそれ以來連中はあまり外へ出なくなつた。その頃は不幸な男も最ふ元氣になつて居た。そして皆が集つて話す時は、何時も話は山の事だつた。スキーの事だつた。そしてその話の槍玉に上げられるのはその不幸な人間であつた。

『H、君の熱は日燒の爲めだよ！』

『いやあれは氣管支炎から來た熱だよ』

と抗辯しても誰もその不幸な人間の言葉を取上げては呉れなかつた。Y先生までが

『H君、君は凍腸の事なんぞ書くから、今度はカラメ手にやられたんだよ』

と彌次られる。可愛そうにもその不幸な人間は其後何時も山の話が出る度に、スキーの話が出る度に、槍玉に上げられて居る。そして今ではその不幸の男も

『そんなら乃公も一つ日燒の研究をやつて見せるぞ』

とがんばつて居る――その不幸の男つて誰かしら!!(終り)

◇彙報抄錄◇

札幌に於ける降雪及融雪期について

暑苦しい夏蟬の聲もいつの間にか消えて、木々の紅葉を愛でて居るのも束の間、もう十月も半ばになると、冷たい手稻嵐も、一入はげしくなつて來る。そして十月下旬には手稻の頂に、待ちあぐんだ白いものを見る事が出來るのである。この頃になると、氣の早い連中は、もうスキーやストツク等を出したり、靴を注文したりする。町を歩くと『スキーと防寒具』等と云ふ久振りの看板が眼立つのだ。左に札幌一等測候所調査にかゝる初雪積雪根雪の初日の過去五ヶ年間の統計を、掲げて見やう。

	初雪日	積雪の初日	根雪の初日
大正七年	十月二十四日		十二月七日
大正八年	十一月九日	十一月二十日	十一月二十五日
大正九年	十月二十四日	十一月十日	十二月四日
大正十年	十一月十日	十一月十八日	十一月十八日
大正十一年	十一月十四日	十一月十四日	十一月十四日
平均月日	十月三十日	十一月十七日	十二月三日

(但し 平均月日は過去三十ヶ年間の平均なり)

僕等は、どんなに初雪を見てから根雪になるまでが待遠しいだらう。朝起きて見ると、二三寸積つて居るので、やれ嬉しやと思つて居ると、お天統樣がいやに照つて、もう正午頃には、影も形もなくなる事が、幾度あつたか知れない

そして幾度も降つては消えして居る中に、遂に十二月上旬には、根雪になるのである。この頃になるとそろ〳〵スキーが出來るのである。十二月中旬頃には、すでに近傍の山と云はず丘と云はず、自由に滑れるのである。

×

僕等の享樂の冬も、ながくは續かぬ。降つた雪は矢張り、春になると融ける。三月中旬から下旬にかけては、殊に猛烈な速度で融けるのである。左に根雪の融雪期ならびに積雪の終日及び終雪日を掲げて見やう。

	終雪日	積雪の終日	根雪の融雪日
大正八年	四月二十日		四月六日
大正九年	四月二十四日	四月七日	三月二十八日
大正十年	四月八日	四月八日	四月八日
大正十一年	四月八日	四月八日	四月八日
大正十二年	四月二十日	四月十九日	三月三十一日
平均月日	四月十九日	四月十日	四月四日

即ち根雪は平均四月四日頃に消えて終ふ。この頃になると札幌近傍の低い丘等では、スキーはやれなくなる。然し其の後も降雪はある事もあるが、それも平均四月十九日以後になれば全然見られない事になる。

×

次ぎに、初雪日終雪日の期間、積雪根雪の初終日の期間を計算して見ると、左の様になる。

初終雪日の期間	百七十二日	約六ヶ月弱
積雪の初終日の期間	百五十五日	約五ヶ月
根雪の初終日の期間	百二十二日	約四ヶ月

かくして、雪が初めて札幌の地に降りてから、翌年の春になつて雪の降り終ひまでの期間は、平均百七十二日即ち、六ヶ月弱である。僕等は半ヶ年雪に接して居るわけになる

然し根雪は、約四ヶ月間あるわけで、これは前年に根雪が降つたときから、ズット消えずに残つて居るものである

この根雪の存在して居る期間が、最もよいスキーシーズンなのである。即ち、札幌及び札幌附近の丘陵は、一年間の三分の一は雪に完全に、蓋はるゝところとなり、スキーヤーの活躍時期なのである。

×

然し、札幌近傍の、手稲山(一〇九六米)級以上の山の融雪期は、札幌の融雪期よりも約一ヶ月乃至三ヶ月も後れるのである。余市岳、中山峠、ムイネシリ等では、五月の下旬でも尚ほ、ゾンメルスキーで滑走が出來るのである(平塚直秀)

登山に必要な

各種の用具

□□□□□□□

小樽市稻穂町大通

梅屋運動具店

電話九八六番　振替小樽七〇番

實價　金壹圓七十錢
送料　一部　四　錢

慶應山岳部年報

登高行

第四年

東京芝三田
慶應義塾
体育會山岳部

內容

山岳の靈　文學博士　鹿子木員信
岩登りに就て　槇有恒
冬の八ケ岳（紀行）　青木勝
三月の槍ケ岳（紀行）　大島亮吉
雪の有峰（紀行）　青木勝
春雪の立山と劍岳（紀行）　三田幸夫
槍の北鎌尾根（紀行）　故板倉勝宣
雪崩に就て（飜譯）
スノークラフト（飜譯）
瞞され易い山稜の傾斜に就て（研究）　三田幸夫
山上所觀（感想）　大島亮吉
山彥（感想）　宮川久雄
△雜錄△年報　（一九二一—二三）
△寫眞　ベタンヒュッテより見たるマッターホルン
とリイスホルンアイガー東尾根登攀
アイガーよりメンヒーの峻稜（以上槇有恒）
槍澤の午後
穗高岳
槍の肩より西北方を望む（以上佐藤久一郎）
室堂附近　豐邊國臣
雄山頂上　佐々木洋之輔
ツボダケに於けるスキー競技會佐藤久一郎

△御希望の節は實費送料共小爲替にて當部宛御申込下さい

▽會　告△

板倉勝宜君追悼號

第二十六號倍大輯
一部金六十錢送料二錢

增刷してありますから尚多數の御注文に應じられます。

山とスキー第二年合本

定價金三圓六十錢
送料　十二錢

全卷アート二百九十五頁。單行本とちつとも變らないものになりました。登山スキーに關する絶好の參考書であります。

原稿、印畫

此の夏の收獲の一端を本誌の爲に與へられん事を切望致します。紀行文なり感想なり、或ひは寫眞印畫なりお餘暇がありましたら御惠送下さらん事をお願ひ致します。

定　價

金參拾錢

※前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。
※御送金はなるべく振替にてお願致します。
※六冊分前金拂込の方には送料を頂きません
※前金の切れた時には最後の分の包裝にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。
※本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

大正十二年七月三十日印刷
大正十二年八月一日發行
（毎月一回一日發行）
編輯者　赤松動
印刷兼發行者　長谷川敦
印刷所　札幌市北一條西二丁目　札幌印刷株式會社
發行所　札幌市北六條西六丁目　山とスキーの會
振替口座小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No. 28. Augutso 1923. Sapporo, Japanujo.

大正十二年七月三十日印刷納本
大正十二年八月一日發行
（毎月一回一日發行）
山とスキー 第二十八號
定價金參拾錢

登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番

振替東京六一二七番